

カトリナ・シュラーガー、マルティン・グトラー、
ヤン・ニクラス・エンゲルス

2021年連邦議会選挙を 分析する

SPDが復活した歴史に残る連邦議会選挙

FES 論文

2021年9月

フリードリヒ・エーベルト財団

フリードリヒ・エーベルト財団 (FES) は、1925年に設立された、ドイツでも最も伝統のある政治財団です。その名の由来となったエーベルトの遺産を今日まで忠実に受け継ぎ、自由・正義・連隊という社会民主主義の基本的価値観に貢献しています。理想は、社会民主主義および自由労働組合との連携です。

FESは、特に次のような活動を通じて、社会民主主義を推進しています。

- 市民社会を強化するための政治的な教育活動
- 政治的助言
- 100か国以上の海外事務所を通じての国際協力
- 才能の育成
- アーカイブや図書館などを通じた社会民主主義の集団的記憶の保存

フリードリヒ・エーベルト財団の分析・企画・コンサルタント部門

フリードリヒ・エーベルト財団の分析・企画・コンサルタント部門は、自らを社会民主主義の未来を示すレーダーであり、シンクタンクであると考えています。当部門では分析と議論を結びつける仕事をしています。学界、市民社会、経済界、行政、政界の専門家が集まっています。当部門の目的は、政治家や労働組合の意思決定者に、現在および未来の課題について助言し、社会政治的な議論を前進する力を与えることです。

著者について

カトリーナ・シュラーガーは、2021年5月からフリードリヒ・エーベルト財団の分析・企画部門の責任者を務めています。それ以前は国際政策分析部門の責任者、上海事務所長など、FESの国際部門のさまざまな役職に就いていました。

マルティン・グトラーは、フリードリヒ・エーベルト財団の分析・企画部門で財団全体に関わるプロジェクトを担当しています。それ以前は、さまざまな国際的な仕事のほか、財団のザクセン=アンハルト州の事務所や、ベルリン市長府に勤務していました。

ヤン・ニクラス・エンゲルスは、フリードリヒ・エーベルト財団の分析・企画部門で、トレンドリサーチとシナリオ開発の責任者を務めています。それ以前は、ハンガリーのブダペスト事務所長をはじめ、ドイツ国内および海外でFESのさまざまな役職を経験してきました。

本出版物に関する責任者

フリードリヒ・エーベルト財団 分析・企画・コンサルタント部門 カトリーナ・シュラーガー

Catrina Schläger, Martin Güttler, Jan Niklas Engels

ANALYSE ZUR BUNDESTAGSWAHL 2021

Eine historische Bundestagswahl mit einem roten Comeback

3	総論 選挙結果の最重要ポイント
5	1 選挙結果の最重要ポイントは何か？
5	1.1 SPDが大躍進—CDU/CSUは結党以来、最悪の結果に
7	2 誰が誰を選んだのか？
7	2.1 東部と西部で同程度の成功を収めた政党は少ない
8	2.2 「年配層」と「若年層」の投票傾向の違い
8	2.3 職業や学歴でも明らかな違いが
10	3 何が選択の決め手となったのか？
10	3.1 SPDが公約と候補者で有権者を説得
12	4 数年前と比べて何が変わったのか？
12	4.1 投票率と郵便投票
12	4.2 投票者の移動
13	4.3 棄権者とその他の政党
15	5 選挙戦はどのように進んだのか？
15	5.1 浮き沈みが激しかった選挙戦
16	5.2 首相候補者という要素が大きく影響
17	5.3 勝因となった党の結束
17	5.4 終盤戦になって初めて明確となった政治的イメージ
18	6 誰が新政権を樹立するのか？
18	6.1 次期政権は3党連立となる
19	6.2 誰もが参加したい—困難な政権樹立
20	7 結論
21	図表目次

総論 選挙結果の最重要ポイント

2021年の連邦議会選挙は、いくつかの点において歴史的にも特異だった。まず、再選を目指す連邦首相がいない初めての選挙だったこと（1949年の第1回連邦議会選挙を除く）。そのうえ、3つの政党が首相候補を立てたこと。しかも選挙戦がパンデミックの最中に実施されたことは、選挙戦の進め方にも直接影響を及ぼし、候補者の危機管理能力に注目が集まることになった。こうした特異性、さらには16年の任期を務めたアンゲラ・メルケル首相の退任、気候変動がもたらした世界レベルでの課題、それに伴う社会生態学的な経済システム改革の必要性が重なったことで、2021年の連邦議会選挙は今後のドイツの方向性を決定づける重要な選挙となった。この不確実な時代に、有権者が政治のリーダーシップを任せるのは誰だろう？ ドイツがコロナのパンデミックから抜け出して必要な1歩を踏み出し、将来にわたって国内の福祉と社会保障を確保できるよう導いてくれるのは、いったい誰だろうか？

選挙結果の最重要ポイントは¹、以下のとおりである

— 社会民主党 (SPD) の復活：SPDが政権を取り戻し、ドイツ連邦議会で次の最大政党となった。比例代表制の得票率25.7パーセントという勝利は、同党の首相候補オラフ・ショルツに負うものだ。アンゲラ・メルケルの時代は終わり、それに伴ってキリスト教民主・社会同盟 (CDU/CSU) も、24.1パーセントと結成以来最悪の結果に終わった。CDU/CSUの得票率は2017年の選挙に比べ、8.9ポイント下がった。緑の党は、14.8パーセントとこれまでで最良の得票率ではあったものの3位に終わり、首相の座を勝ち取るという目標は果たせなかった。4位は自由民主党 (FDP) で、比例代表制で得票率11.5パーセントと、わずかな票の伸び (0.7ポイント) を見せた。

- 3つの勝利：だがSPDは連邦議会だけでなく、メクレンブルク=フォアポンメルン州議会選挙と、ベルリン市議会選挙でも最大政党となった。マヌエラ・シュヴェーグヒヒは39.6パーセント (+9) という驚異的な得票率で州首相の座を守り、ベルリンではフランツィスカ・ギフェイが得票率21.4パーセント (-0.2) を獲得して、新市長に就任する見込みだ。
- 新しい連立政権：CDU/CSUとSPDの党幹部は大連立政権の継続を拒否しているため、来る政権は3党連立となる。選挙で最大政党となったSPDは、もちろん次期政権樹立の任務を担う。連邦初の「信号機連立」は、いずれも得票数を伸ばした3党で結成される選挙戦勝利者の連立となるだろう。だが今のところアルミン・ラシェットも、その明らかな敗北にもかかわらず連立政権への参加を要求し、「ジャマイカ連立」の樹立を目指している。もっともこれには、同盟の内部からも批判の声が上がっている。有権者に対する世論調査で結果がはっきり出ているからだ。同盟とSPDを直接比較した場合、50パーセントがSPD主導の政権を希望したのに対し、同盟による政権を望んだのはわずか29パーセントだったのである。
- 首相候補者という要素が大きく影響：オラフ・ショルツは全ての世論調査で、大差で最高の支持率を得た。もし国民が直接選挙で首相を選ぶとしたら、ショルツが得票率45パーセントと圧倒的な勝利を収めるのに対し、アルミン・ラシェットは20パーセント、アンナレーナ・ベアボックは14パーセントにとどまるだろう。
- だが公約も大事だった：選挙戦でのSPDの勝利は、オラフ・ショルツ個人の高い支持率と、この選挙で有権者が最も大事と考える諸問題に関する、党の能力への高い評価によるものだった。選挙前の世論調査で得られたこうした見解は、選挙後の調査でも確認された。SPDに投票したという回答者の44パーセントが、公約を理由に選んだと答えた。また36パーセントが、候補者を理由にSPDに投票したという。

¹ 数値やデータは、連邦選挙管理委員会による暫定最終結果、Infratest Dimapによる選挙前調査と出口調査と選挙分析、Civeyによる世論調査に基づいている。

- － 勝因：だからSPDの勝利は、CDU/CSUと緑の党が失敗したおかげだけではない。SPDは2017年連邦議会選挙での苦い失敗を生かし、急降下していた支持率の流れを変え、上向きにさえした。早い首相候補者の指名、その後の包括的な公約の作成、党指導部による左派と右派の統合で、SPDは団結し強くなることができた。
- － 新しい門出、だが経験も必要：多くの人は、メルケル政権の終わり頃になって考え始めた。「アンゲラ・メルケル以外に、首相になれるのは誰だろうか?」。3分の2近くが、政治の新しい出発を象徴するような首相を望んでいた。だが同時に3分の2が、指導者としての経験がある首相を望んでいたのだ。有権者から見て、オラフ・ショルツはまさに期待どおりの経歴を持っていた。副首相だったショルツは継続の象徴とも言えるが、選挙戦で論じられた政策テーマ（最低賃金、年金、住宅建設、気候保護）に関しては、多くの人にとって新しい始まりも意味していたのである。
- － 東西で同じように強いSPD：SPD（ドイツ西部：26.1パーセント/ドイツ東部：24.2パーセント）とFDP（ドイツ西部：11.9パーセント/ドイツ東部：9.6パーセント）だけが、東西いずれでも同じように強く、他の党は主に東か、西か、南のいずれかに強い地域が偏っている。勝ち取った小選挙区数を見ると、SPDが東部でも西部でも同じように勝利を収めたのがわかる。たとえばメクレンブルク＝フォアポンメルン州とブランデンブルク州では、SPDが小選挙区制では全選挙区で勝利を収めた。ブレーメン州とザールラント州も同様である。SPDが弱い州はこれまでどおりバーデン＝ヴュルテンベルク州、ザクセン州、バイエルン州だが、小選挙区制では議席を獲得することができたし、比例代表制では連邦議会の結果に迫った。なかでもザクセン州では、SPDは得票率を合計8.7ポイントも伸ばした。ここよりも大きな躍進を遂げたのは、メクレンブルク＝フォアポンメルン州（+14,0）、ブランデンブルク州（+11,9）、ザクセン＝アンハルト州（+10,2）、テューリンゲン州（+10,2）、ザールラント州（+10,1）だけである。
- － 浮き沈みが大きかった選挙戦：振り返ると、今回の選挙戦はそれぞれ違う党が本命となった3つの時期に分けることができる。緑の党が有望だった夏の初め、CDU/CSUが勢いを増した夏、そしてSPDが盛り返した夏の終わりである。SPDは、今回の選挙では大差での勝者である。「もし今週の日曜が投票日だったら、誰に投票しますか?」というお馴染みの日曜世論調査を見ると、SPDはわずか数週間のうちに緑の党、CDU/CSUのいずれも10ポイント以上引き離して1位となった。

1

選挙結果の最重要ポイントは何か？

1.1 SPDが大躍進 —CDU/CSUは結党以来、最悪の結果に

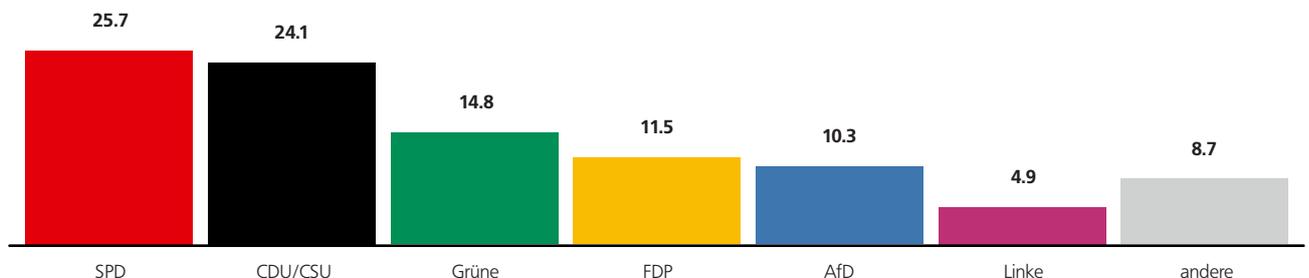
選挙区マップが、社会民主党 (SPD) のシンボルカラー、赤に染まった。2017年の連邦議会選挙ではまだ地図全体がキリスト教民主・社会同盟 (CDU/CSU) を表す黒で、別な色の斑点がところどころにあるだけだったが、今ではSPDの勝利が一目瞭然だ。SPDは前回の選挙に比べて、比例代表制だけでなく、小選挙区制でもより多くの議席を勝ち取り、得票率25.7パーセントで最大政党となった。特に東部、北部、西部の州では有権者の説得に成功し、数多くの小選挙区でSPDが勝利した。このうちブランデンブルク州とメクレンブルク＝フォアポンメルン州では全ての小選挙区制で勝利を収めている (2017年には、SPDは1議席のみ)。ザールラント州とブレーメン州でも、小選挙区制の議席は全てSPDが勝ち取った。小

選挙区制でのSPD最多の票を集めたのはアウリッヒ・アムデン選挙区のヨハン・ザートホフ候補者で、得票率は52.8パーセントだった。

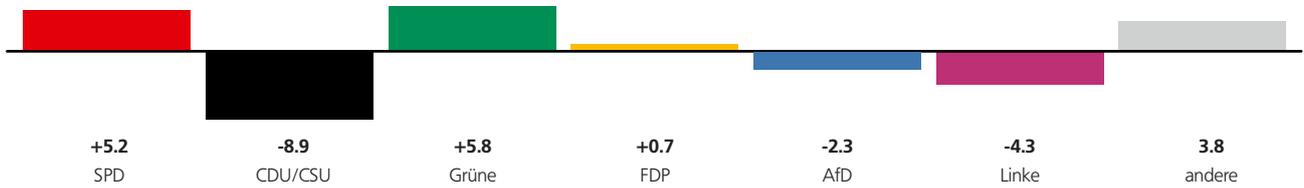
さらに明白なのは、比例代表制での躍進である。SPDが小選挙区制では他党に敗れながらも、比例代表制では第1党となった選挙区は数多くある。2017年に、北部 (東西ともに) の選挙区マップが一部の例外を除き黒一色に染まったのとは反対に、今回はほとんど真っ赤になった。東部ではSPDは最大政党となった。

CDU/CSUの得票率は24.1パーセントと、史上最悪の結果となった。バーテン＝ヴェルテンベルク州では、CDUがほとんどの小選挙区を、バイエルン州ではCSUが1選挙区を除く全ての小選挙区を勝ち取ったものの (ミュンヘン南選挙区は緑の党が獲得)、比例代表制は前回の選挙とは逆の結果になった。CSUは得票率31.7パーセントと、結党以来2番目に悪い数字

図表 1
2021年連邦議会選挙比例代表制の得票率 (%)

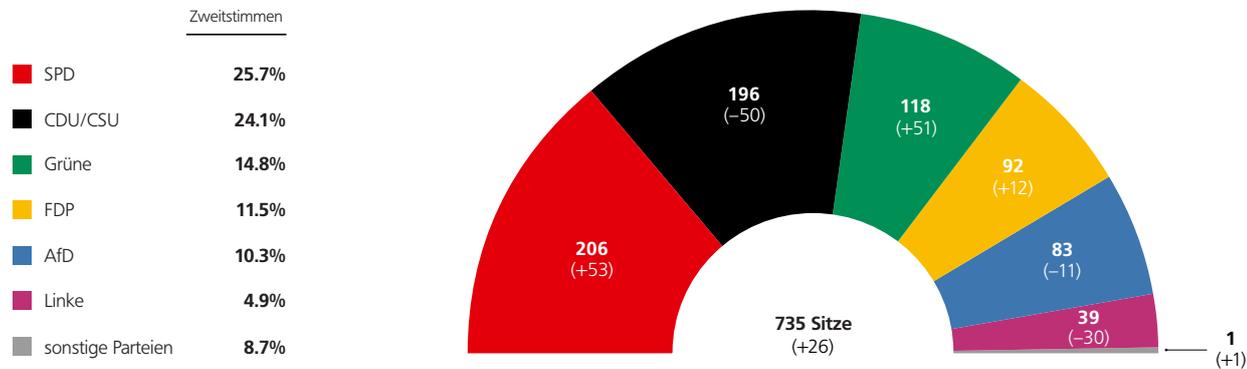


図表 2
Gewinne und Verluste im Vergleich zur Bundestagswahl 2017 (in %)



出典 : infratest dimap.

図表 3
2020 年ドイツ連邦議会の議席配分



出典 : infratest dimap.

だった (1949年第1回連邦議会選挙の29.2パーセンに次ぐ)。CDU/CSUは、比例代表制で合わせて8.9パーセントの票を失った。

緑の党は14.8パーセントの票を獲得、連邦議会において結党以来最良の選挙結果となった。さらに、小選挙区制でもいくつかの議席を勝ち取った。緑の党の候補者らは、特に大都市で勝利を収めた。比例代表制でも同じだった。同党は、都市中心部で多くの票を集めた。

FDPは、いくぶん票を増やし、比例代表制で11.5パーセントの票を獲得した。だが、小選挙区制では議席を獲得できなかった。

ドイツのための選択肢 (AfD) は、得票率10.3パーセントまで落ち込み、再び2017年のような成果を上げることはできなかった。だが小選挙区制ではいくつかの議席を獲得できた。ザクセン州では最大政党となったほか、チューリンゲン州とザクセン=アンハルト州でも議席を獲得した。小党分裂が進んだおかげで、小選挙区では20パーセント強の得票で勝てるようになったのだ。AfDは2度目の連邦議会入りで、ドイツの政党システムの中にすっかり定着したと言える。

左派党は得票率4.9パーセントと、5パーセント条項のハードルは超えられず、連邦議会で院内会派として認められる最

低条件である3つの小選挙区での勝利がやっとだった (ベルリンで2、ライプツィヒで1)。これは左派党にとって、この15年で最悪の結果である。

今回の選挙のその他の政党の得票率は8.7パーセントで、2017年より3.8パーセント多くなっている。

連邦議会の議席は、超過議席 (Überhangmandat) と調整議席 (Ausgleichsmandate) で735に増えた (これまで709議席、法定議席は598)。これにより、CDU/CSU会派が最も大きな打撃を受けた。50議席を失い、196議席となったのである。最大の躍進はSPD会派で (+53)、議員数は206人となった。緑の党会派も大幅に議席を伸ばし (+51)、118議席となった。FDPも議席数を増やし (+12)、92議席となった。左派党は30議席を失い、39議席となった。AfDは11議席を失い、これで議員数は83人となった。さらに、南シュレースヴィヒ選挙人同盟は、連邦議会に1議席を獲得している。

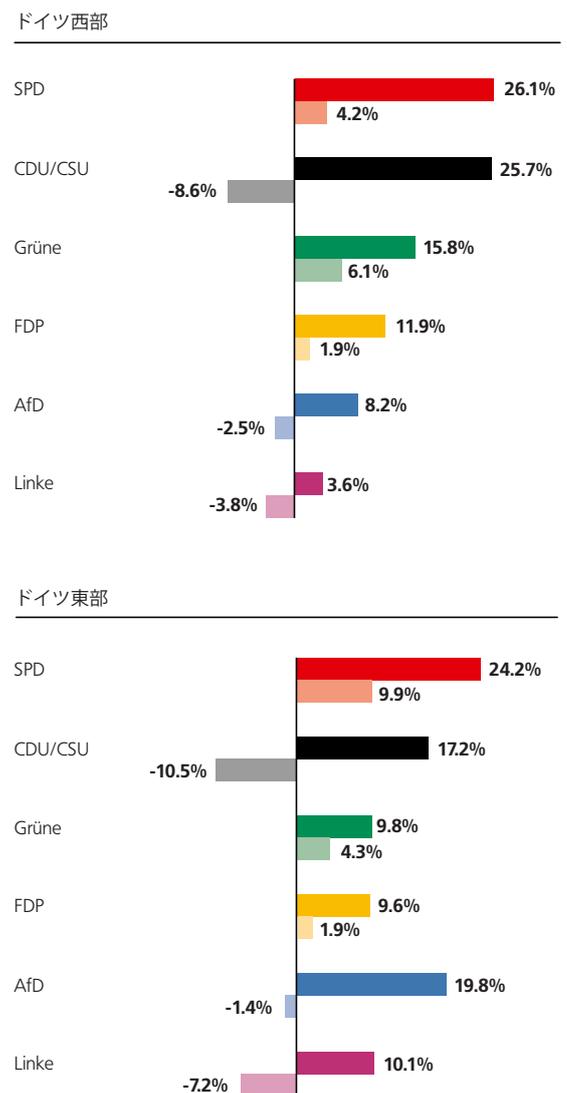
2

誰が誰を選んだのか？

2.1 東部と西部で同程度の成功を収めた政党は少ない

様々な人口グループを検証すると、2021年の選挙結果は、政党間で大きな違いがあることがわかる。たとえばほとんどの政党はドイツ東部と西部で大きな格差がある。AfDの場合、東部では比例代表制の得票率19.8パーセントで、特にザクセン州（24.6パーセント）とテューリンゲン州（24.0パーセント）では強かった。だがドイツ西部では、得票率8.2パーセントに留まった。左派党は、東部のいくつかの拠点で大幅に票を失ったが、それでも東部全体では比例代表制の得票率は10.1パーセントだった。これに対して西部では、合計3.6パーセントしか票が集まらなかった。CDU/CSUと緑の党は、これと反対で、いずれも東部では西部よりはるかに弱かった。CDU/CSUは、比例代表制の西部での得票率が25.8パーセントだったのに対し、東部の州では比例代表制で17.2パーセントに留まった。緑の党は、西部で比例代表制の得票を6.1ポイント伸ばして15.8パーセントとした。しかし東部では、得票数の伸びは4.3ポイントに留まり、得票率は9.8パーセントだった。東と西でほぼ強さが同じなのはFDP（ドイツ西部11.9パーセント、ドイツ東部9.6パーセント）とSPD（ドイツ西部26.1パーセント、ドイツ東部24.2パーセント）だけである。SPDの東部での伸び9.2ポイントは、特に大きかった。小選挙区マップを見ると、SPDが東部でも西部でも同じように勝利を収めたことがわかる。SPDは、東部のメクレンブルク＝フォアポンメルン州とブランデンブルク州の小選挙区でも、西部のプレーメン州やザールラント州などと似たような結果を収めた。SPDが引き続き弱い地域は、バーデン＝ヴュルテンベルク州、ザクセン州、バイエルン州だが、それでも小選挙区を勝ち取り、さらに比例代表制でも連邦議会の割合と近い結果を収めた。ザクセン州では、SPDは全体で8.7ポイント票を増やしさえしている。ザクセン州より大きく票を伸ばしたのは、メクレンブルク＝フォアポンメルン州（+14.0）、ブランデンブルク州（+11.9）、ザクセン＝アンハルト州（+10.2）、テューリンゲン州（+10.2）、ザールラント州（+10.1）だけだった。

図表 4
比例代表制 東西の比較（% および増減率）



出典：出口調査

2.2 「年配層」と「若年層」の投票傾向の違い

今回の選挙では、性別による投票行動の違いはわずかったが、年齢別では投票の仕方に大きな違いが見られた。最も若い年齢層（18-24歳）では、23パーセントが小選挙区制で緑の党に投票した。その次に僅差で続いたのがFDPに投票した21パーセントで、この年齢層では9ポイントの増加だった。その後が続いたのがSPDへの投票で15パーセント、CDU/CSUはこの年齢層では大幅に落ち込み（-14ポイント）、投票はわずか10パーセントに留まった。その次が左派党の8パーセントとAfDの7パーセントだった。

60歳以上の有権者グループでは、その状況は全く違う。SPDが比例代表制で10ポイント伸ばして34パーセント獲得、1位となった。その後CDU/CSUが33パーセントで続いたが、他の全ての年齢層と同様、支持を失った。その他の政党は全て、大きく引き離された。緑の党はたしかに得票を増やしたが（3ポイント）、8パーセントに留まった。FDPとAfDもやはり得票率8パーセントだったが、いずれも2017年に比べると、それぞれ2ポイントずつ下がった。左派党のこの年齢層での得票率は、さらに半分の4パーセントだった。同党は全ての人口グループで敗北したが、若年層の方がまだ結果はよかった。

AfDは、35-44歳の年齢層で最もよい結果を出した唯一の政党である。同党は、全ての人口グループで票を減らしたが、経済状態に不満があり他の政党に失望した人々からは相変わらず大きな支持を得ている。

2.3 職業や学歴でも明らかな違いが

投票行動は、学歴や職業によっても大きく違った。年金生活者からの支持が最も高かったのはSPDで、全体の35パーセントを占めた（+7ポイント）。2位はCDU/CSUの34パーセントで、7ポイントの減少だった。3位は緑の党だが、わずか10パーセントと、差は大きかった。

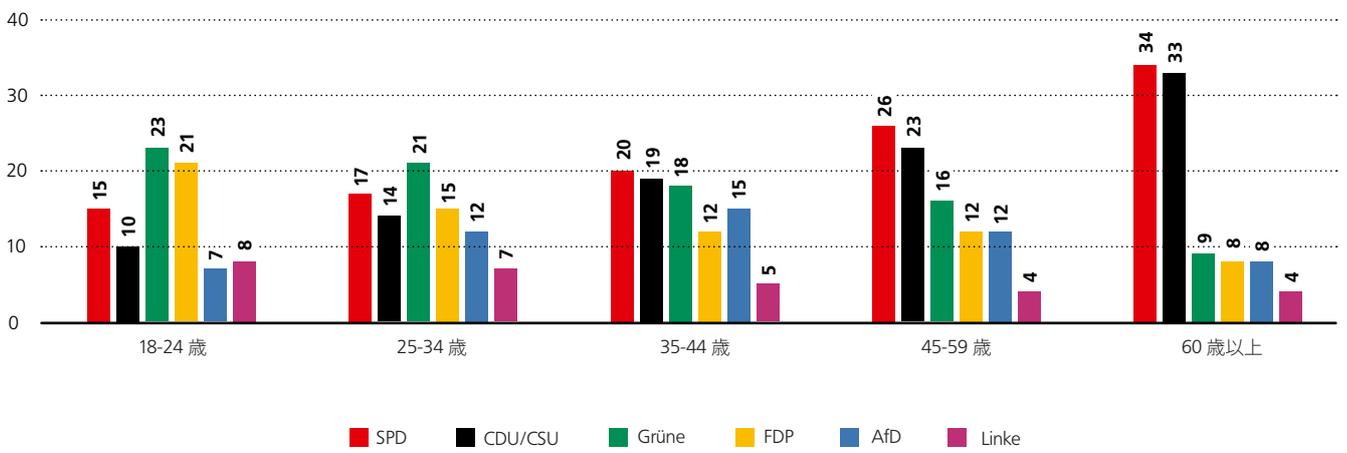
SPDはブルーカラーの間でも26パーセント（+3）と、平均を上回る支持を受けた。AfDの21パーセント（+/-0）、CDU/CSUの20パーセント（-5）に明らかな差をつけ、1位となっている。左派党への支持はわずか5パーセント（-5）で、FDPの9パーセント（+1）や緑の党の8パーセント（+3）よりさらに低かった。

自営業者の間では、CDU/CSUが26パーセントの支持を受けたが、それでも10ポイントの減少だった。2位はFDPで、比例代表制で19パーセントの支持を得た。SPDと緑の党はそれぞれ支持率16パーセントと、いずれもこの職業グループでの支持を伸ばした。

公務員の多くはCDU/CSUを好み29パーセントが支持したが、前回に比べると7ポイントの減少だった。一方、この職業グループでは24パーセント（+8ポイント）が緑の党を支持した。SPDへの支持率は19パーセントと、1ポイントの増加だった。

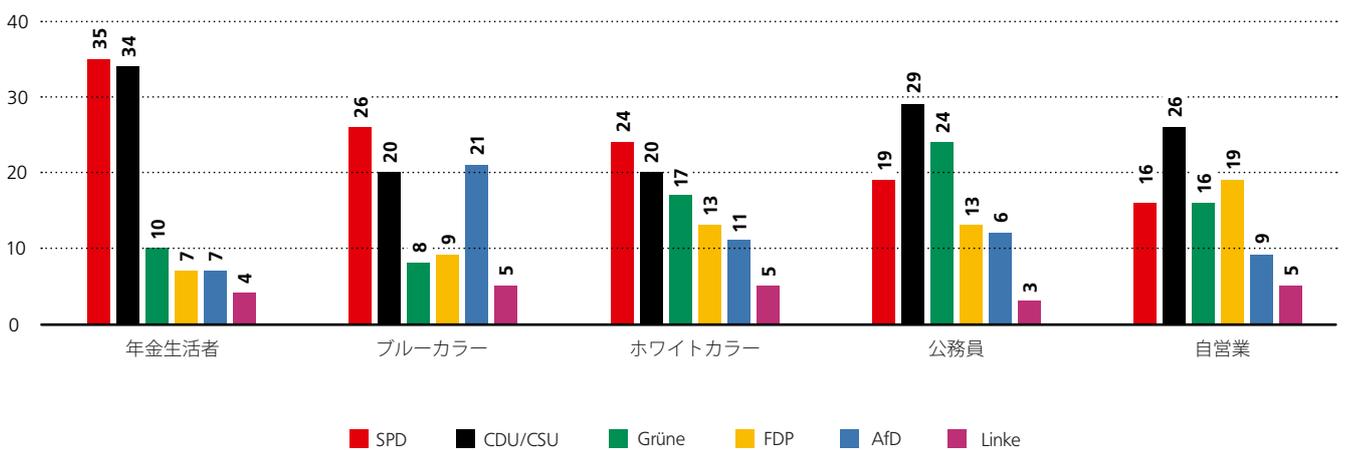
職業としばしば密接に結びついているのが、学歴である。中低学歴の有権者層ではSPDの支持率が最も高く、それぞれ33パーセント（+7）と27パーセント（+6）となっている。CDU/CSUは中学歴層では31パーセント（-7）、低学歴層では24パーセント（-9）の支持しか受けていないため、これでSPDと首位が入れ替わったことになる。高学歴有権者層からの支持第1位は緑の党の23パーセント（+9）で、平均を大幅に上回る支持を集めた。SPDは22パーセント（+4）、CDU/CSUは21パーセント（-9）と、僅差でこれに続いている。

図表 5
年齢層別支持政党 (%)



出典：出口調査

図表 6
職業別支持政党 (%)



出典：出口調査

3

何が選択の決め手となったのか？

3.1 SPDが公約と候補者で有権者を説得

有権者の投票動機は何であったかを考えてみると、SPDが今回の連邦選挙戦で最大政党となったのは、選挙公約だけでなく首相候補のおかげもあったのは明らかである。もし今回の連邦議会選挙が連邦首相を選ぶ直接選挙であったなら、もちろんオラフ・ショルツが首相となっていただろう。世論調査では有権者の45パーセントがショルツを直接選びたいと答えており、それぞれ20パーセントと14パーセントのアルミン・ラシェットやアンナレーナ・ベアボックを大幅に引き離しているのだ。

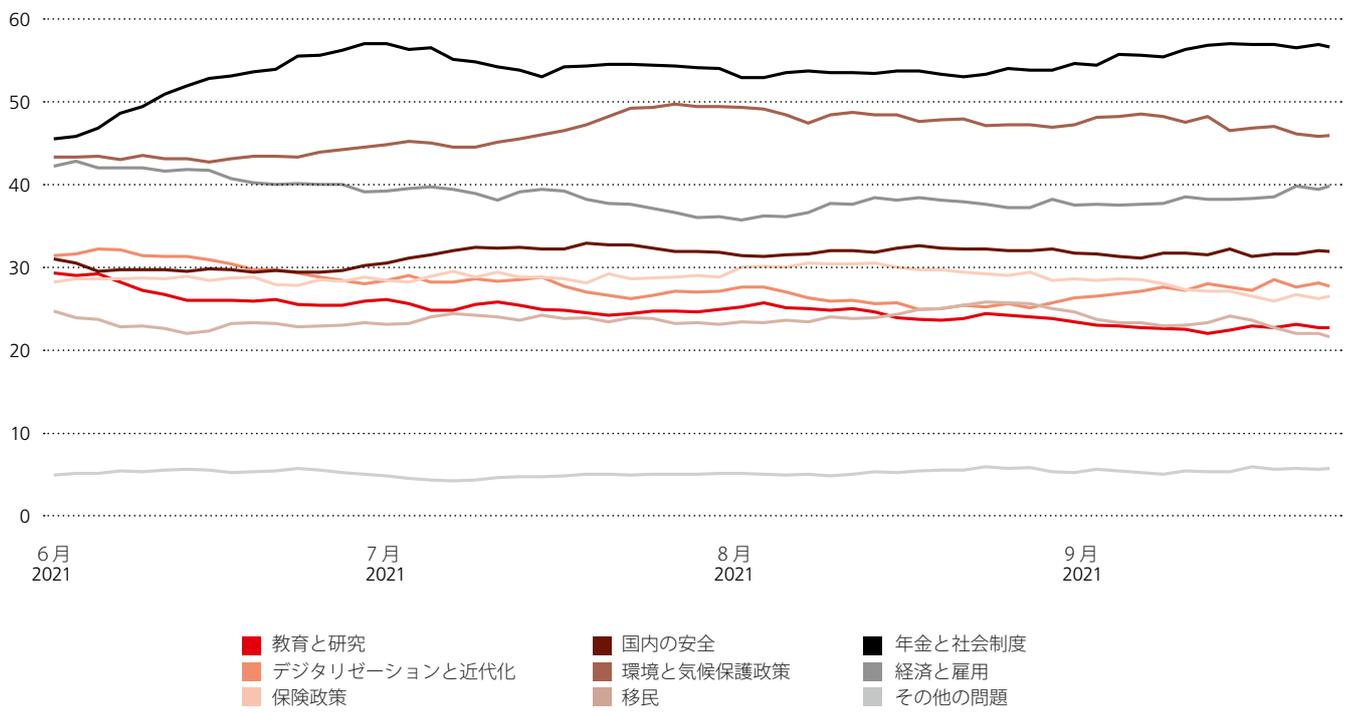
今年7月の時点の情勢調査では、緑の党がすでに支持率18パーセントと3位に後退していたのに対し、SPDとCDU/CSUの両首相候補者らは、まだ同程度の勢いだった（ショルツ29パーセント、ラシェット28パーセント）。だが8月の情勢調査では、状況は一変していた。調査はドイツ西部で起きた洪水災害直後に実施されたため、候補者への支持率に直接影響したのである。ラシェットの支持率は20パーセントに下落し、ショルツのそれは35パーセントに上昇した。一方ベアボックの支持率はさらに少し下がって16パーセントとなった。この時点ではまだ回答者の多く（35パーセント）は、CDU/CSUが次の政権を執ることを支持していた（SPD 25パーセント、緑の党16パーセント）。ところがその後数週間で、直接首相を選ぶならという質問でショルツの支持率が上がっただけでなく、どの政党が次期政権を握るべきかという質問でもSPDが着々と支持率を上げ、風向きを変えたのである。CDU/CSU主導の現政権に対する支持率が28パーセントに過ぎないのに対し、SPDの支持率はこの時点で38パーセントとなった（緑の党は14パーセント）。これはつまりSPDが、首相候補者だけでなく政党としても、選挙直前の数週間で有権者らを納得させることができたということである。

これは、2021年連邦選挙の時点で人々が最も大事と考える政策テーマ、そして各党に期待される能力を見ても明らかである。Instituts Civeyが選挙前に行った世論調査では、候補者選別に最も大きな影響を与える3つの政策テーマはどれか尋ね

た。すると56.3パーセントが「年金と社会制度」、次に46.2パーセントが「環境および気候保護政策」、続いて39.1パーセントが「経済と雇用」と答えた。各政党の能力比較では、SPDは「環境および気候保護政策」と「雇用以外の経済問題」を除けば、残りの政策テーマに関しては他の党よりもはるかに有能と考えられていることが明らかになった。「年金問題」（SPD 36パーセント、CDU/CSU 20パーセント、緑の党 4パーセント）、「保健政策」（SPD 33パーセント、CDU/CSU 24パーセント、緑の党9パーセント）、「家族政策と保育」（SPD 32パーセント、CDU/CSU 18パーセント、緑の党 19パーセント）、「社会正義」（SPD 40パーセント、CDU/CSU 15パーセント、緑の党7パーセント）といった問題では、明らかにより多くの人々が、今後の課題を解決するためにSPDに信頼を寄せている。一方、「環境および気候保護政策」についてはほとんど半数が（48パーセント）、今後の課題を解決できる可能性は緑の党が最も高いと答えたのに対し、SPD（13パーセント）とCDU/CSU（12パーセント）はこのテーマに関しては非常にわずかな能力しか持っていないと思うと答えた。また、回答者のおよそ44パーセントが、SPDが適切な賃金を保証してくれると信頼していると答えたのに対し、CDU/CSUについて同じように答えたのは16パーセント、緑の党についてはわずか5パーセントだった。3つの最も重要な政策テーマのうち、CDU/CSUがより優れていると考えられているのは経済問題だけだった。「経済」についてはCDU/CSUの支持率は32パーセント、次にSPDが僅差で25パーセント、緑の党は6パーセントだった。FDPIはこの政策テーマで自党最高の16パーセントを得ており、おかげで選挙区以外でもこの政策テーマでポイントを上げることができた。

このようにSPDの勝利は、オラフ・ショルツ候補個人に対する高支持率と、今回の選挙で人々が最も重要だと思う政策テーマの大半に関して、SPDが他より明らかに高い能力があると評価されたおかげでなのである。選挙前の世論調査で得られたこうした観察結果は、選挙後の調査でも確認された。SPDに投票したという回答者の44パーセントが、公約を理由に選んだと答えており、36パーセントが候補者を理由にSPDに票を入れたと話している。

図表 7
2021年の連邦選挙で、あなたの投票判断に最も影響を与える3つの政策テーマは何ですか？ (%)



出典: Civey 2021年9月24日時点のデータ

4

数年前と比べて何が変わったのか？

4.1 投票率と郵便投票

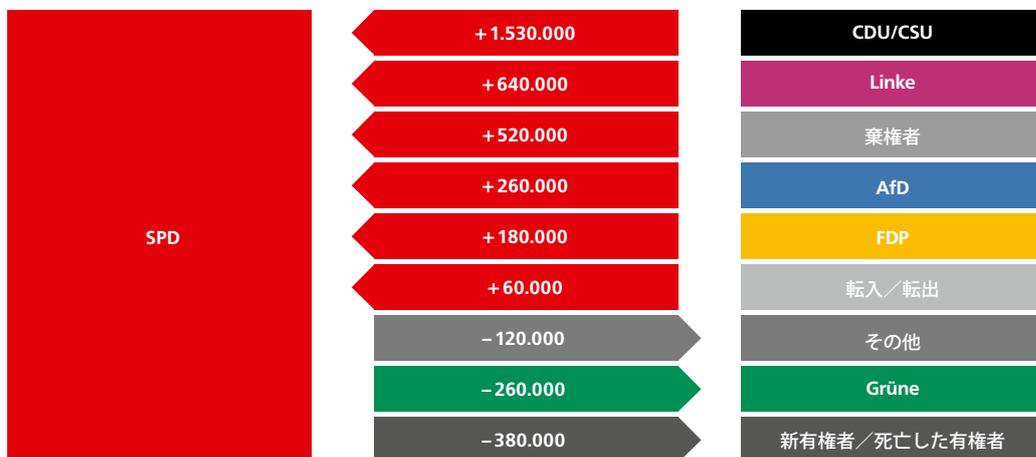
今回の選挙では、6,120万人近い有権者のうち、4,680万人以上が選挙権を行使した。その結果、投票率はわずかに0.4ポイント上がって、76.6パーセントとなった。だが有権者数が減ったため、実際の投票数は2017年よりも少なかった。収入と投票率の間に関連があるかどうかは、現時点のデータでまだ把握できない。「低収入層ほど投票率が低い」傾向が続いているかどうかの分析は、これからである。

郵便投票者の割合については、現時点ではまだデータがない。有権者の約40パーセントがこの方法を申請したため（特にコロナ禍のため）、郵便投票の数はおそらくかなり増えたものと見られている。

4.2 投票者の移動

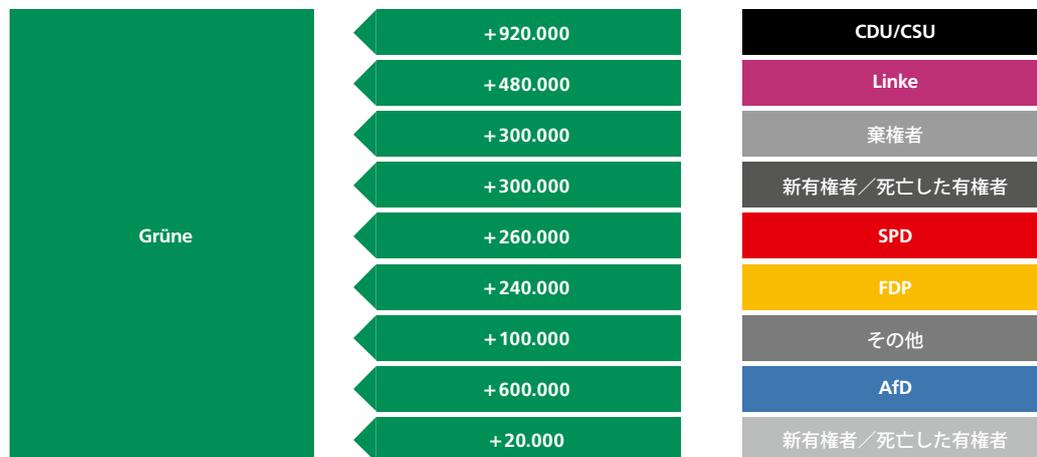
投票者の流れを把握することは、方法論的に非常に難しい。本論での評価は、抽出された代表的な560の投票所や選挙区でInfratest Dimapが実施した出口調査に基づいている。SPDは2017年に比べて220万票、得票数を増やした。その大部分を占める153万票は、CDU/CSUから流れてきた票だ。だがこれまでのメルケル支持者だけが、オラフ・ショルツとSPDを選んだわけではない。64万票は、以前、左派党を支持していた有権者の票である。3番目に大きなグループである52万票は、それまで棄権していた有権者の票だ。26万票はかつてのAfD支持者の票で、増加分の10パーセントをやや上回る。18万票は元のFDP票、6万票は有権者転入のための増加である。一方、SPDが失った票のうち約38万票は有権者の死亡によるもの、26万票が緑の党に流れたもの、12万票がその他の党に流れたものだった。

図表 8
投票者の移動 SPD



出典: infratest dimap.

図表 9
投票者の移動 Grüne



出典: infratest dimap.

図表 10
投票者の移動 CDU/CSU



出典: infratest dimap.

票を伸ばした順位では、緑の党も横並びで第1位となった。かつてのCDU/CSU支持者から92万票、かつての左派党支持者から48万票、それまでの棄権者から30万票を増やしている。また、初めての投票で緑の党を選んだ新有権者の数は、30万人だった。緑の党は合計で250万票以上を増やした。

結党以来最悪の結果となったCDU/CSUの有権者の流れは、全く違う様相を呈している。AfDから8万票、転入で4万票、左派党から2万票と、票の増加はわずかだった。CDU/CSUの得票は、合計で1100万票をわずかに超えたのみで、430万票近くを失った。すでに言及したように、最も多かったのはSPDへの移動で153万票、次に緑の党へ移動した票が92万

票である。しかし有権者の死亡と、新有権者の関心の低さでも、89万票を失った。さらにFDPへ49万票、その他の政党へも49万票が流れている。

4.3 棄権者とその他の政党

よいニュースは、棄権者の数が減ったことだ。SDPIは、かつての棄権者のほとんどを集め、52万票を増やすことができた。さらに緑の党が30万票を、FDPが4万票を増やした。これに対しかつてのCDU/CSU支持の5万人、AfD支持の18万人、左派党支持の32万人が、新たに棄権者となった。

図表 11
投票者の移動 棄権者



出典: infratest dimap.

その他の政党へ流れた票も、興味深い。かつての棄権者21万人が、これまで連邦議会に議席を持たなかった政党に投票したのだ。こうした政党は、比例代表制の8.7パーセントを占めている。その中で最も伸びたのが自由投票者党で、得票率を1.4ポイント伸ばして2.4パーセントとなった。比例代表制の1パーセント以上を獲得した政党は、動物保護党、(1.5パー

セント)、バークス党 (1.4パーセント)、パルタイ党 (1.0パーセント) である。こうした党への票の一部は、連邦議会で多数を占める政党の政策への不満の表れなのだが、パンデミックや政治全般への嫌悪感を考えれば、票の増加は非常に少なかった。

5

選挙戦はどのように進んだのか？

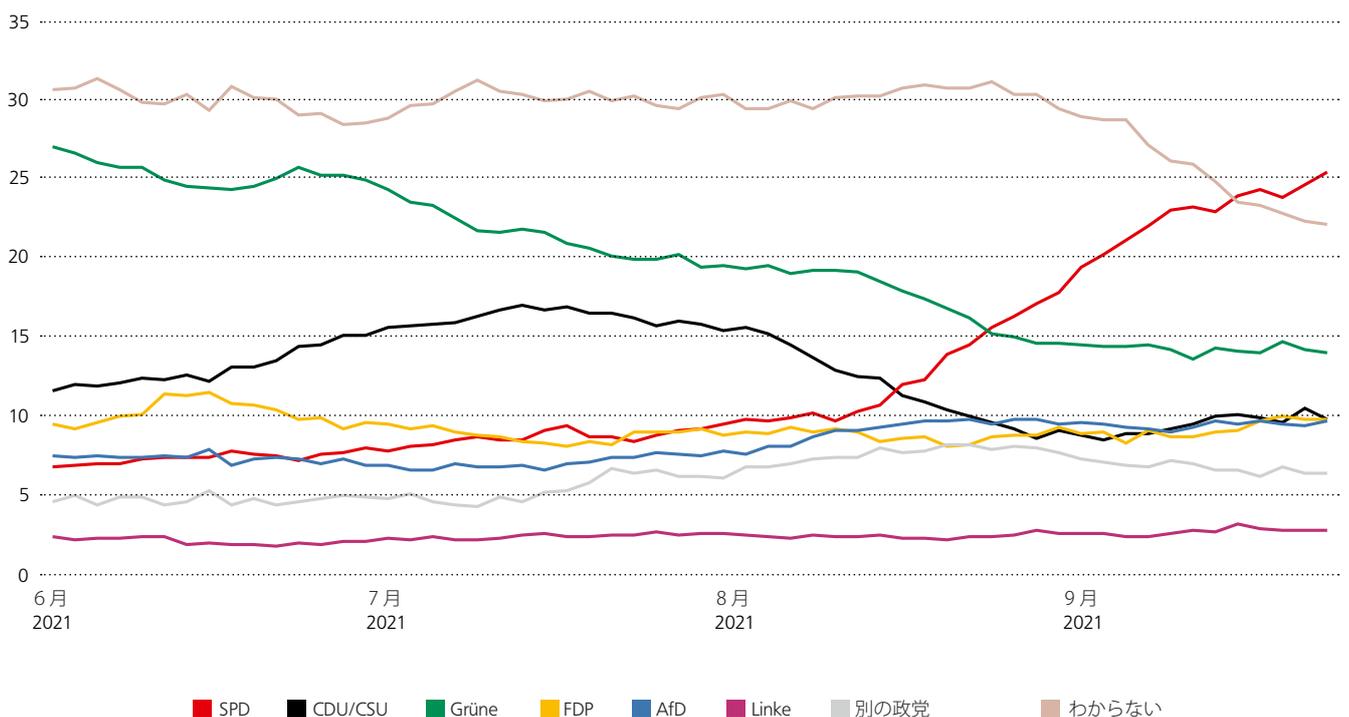
5.1 浮き沈みが激しかった選挙戦

振り返れば、今回の選挙戦はそれぞれ違う政党が優勢だった3つの時期に分けることができる。緑の党の躍進、CDU/CSUの衰退、そしてSPDの復活である。第1期は夏の初め、緑の党が躍進し首相の座を視野に入れていた。緑の党とCDU/CSUが一騎打ちを繰り広げる一方、SPDは多くの人か完全に蚊帳の外に置かれていた。この時期の日曜世論調査（次の日曜が選挙なら誰を選ぶか？）でのSPD支持率は15パーセント

で、コロナで暗い1年さながらの不調さだった。それとは裏腹に、緑の党は2019年の欧州議会選挙の結果（20,5パーセント）のおかげで選挙戦を有利に開始、4月にはアンナレーナ・ベアボックの首相候補指名でCDU/CSUを追い越しさえした。だが、経歴修正、未申告収入、盗作疑惑といった一連の失敗により、緑の党はこの勢いを保つことができなかった。代わりに地盤を回復したのが、CDU/CSUである。だが、この選挙戦第2期である夏の間、首位を独走したにもかかわらず、CDU/CSUは逃げ切ることができなかった。困難な首相候補

図表 12

今回の連邦議会選挙において、これまでのところ、どの政党が最も説得力のある選挙戦を展開していると思いますか？ (%)



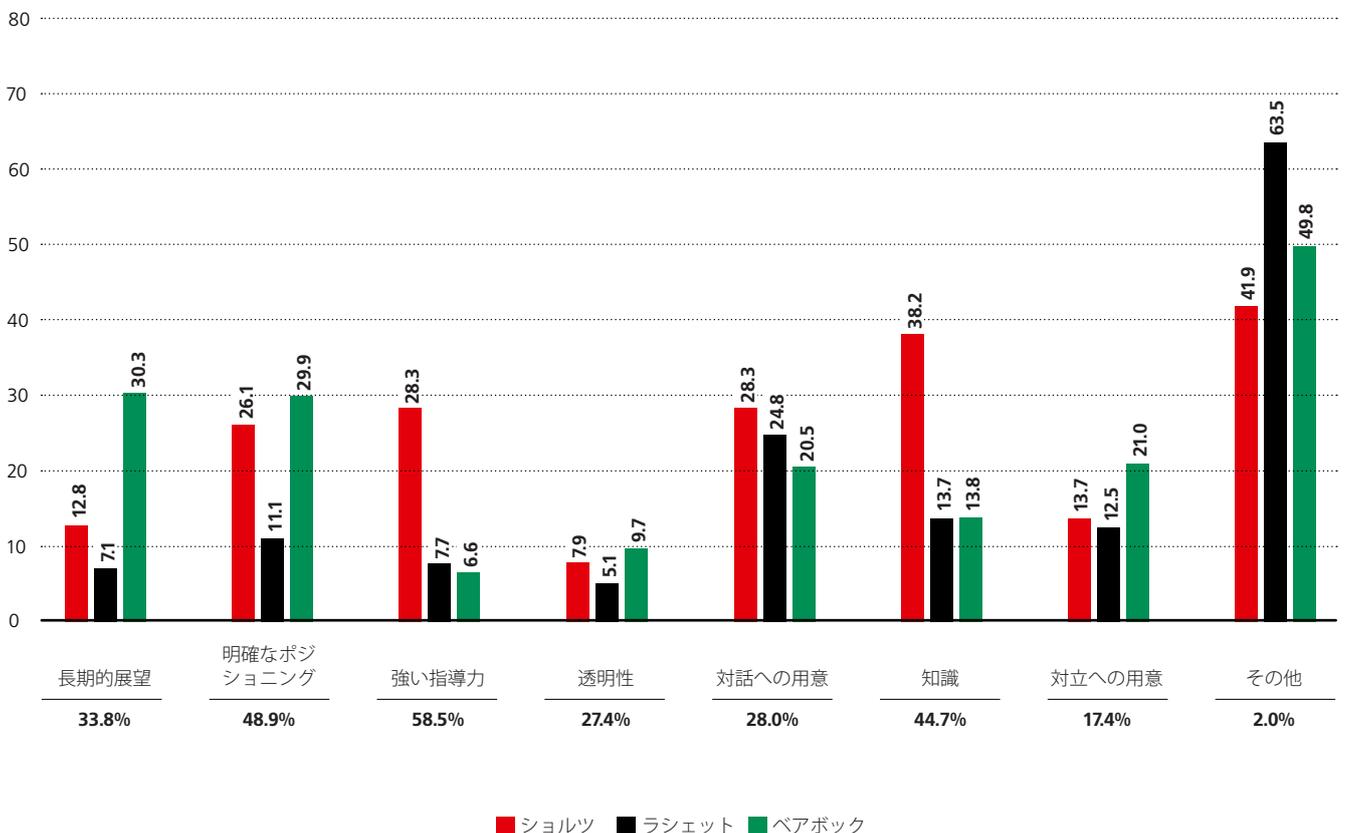
者選びと、数多くの党内のいざこざにかまけすぎたのである。そしてこの夏の間に、アンゲラ・メルケルは本当にもう首相に立候補しないのだという認識が、有権者の間に広まったにちがいない。このため、選挙戦では現職が有利といういわゆる「現職ボーナス (Amtsbonus)」の特典もなくなった。洪水と、CDU首相候補の残念なシーンが転機となり、SPD復活という選挙戦の第3期が始まる。SPDは、世論調査で支持率を上げ続け、緑の党とCDU/CSUを10ポイント引き離すことができた。風向きが変わり、選挙戦の最終段階はSPDとCDU/CSUの一騎打ちとなった。これほど大きな変動は、ドイツの連邦議会選挙ではいまだかつて見られたことがなかった。

有権者らは、日曜世論調査結果の推移を見ながら、各党の選挙戦を評価した。今回の選挙では緑の党が急上昇した後、CDU/CSUの失敗が続き、そのおかげでSPDが大躍進できた。こうした選挙戦の成否は、様々な要素で決まる。いずれにせよ説得力のある候補者、(しかしまず何よりも) 党員を動員できる団結した政党、そして党の政治的イメージを実現する強固な公約が必要なのである。

5.2 首相候補者という要素が大きく影響

今回の選挙戦では、首相候補者という要素も大きく影響した。これまでの連邦議会選挙では、メルケル首相はいつも「現職ボーナス」を活用できた。メルケル首相が政治の舞台から去ることで、多くが初めて考え始めたのだ。アンゲラ・メルケル以外の誰が、首相になるのだろうか? 有権者の3分の2が、政治の新しい出発を象徴するような首相を望んでいることを、まずは重視しなければならない。同時に3分の2が、首相に政権経験者であることを求めている。メルケル時代の終わりにあたって、ドイツ国民は新しい門出、だか経験に裏打ちされたものを求めているのである。ドイツ人にとって、首相としての資質で重要なのは、「強い指導力」、「明瞭な政策」、「知識」、そして「長期的展望」だ。3人の候補のうちいずれも、これらの点について過半数の支持を得ている者はいなかった。それでもオラフ・ショルツは、最も幅広い支持を集めており、「知識」(38パーセント)、「指導力」(28パーセント)、「対話への用意」(28パーセント)、「明瞭な政策」(26パーセント)に関して高いポイントを上げた。アンナレーナ・ベアボックについては、「長期的展望」(30パーセント)、「明瞭な政策」(30パーセント)、「対立への用意」(21パーセン

図表 13
連邦首相の政治スタイルで重要だと思うことは何ですか? (%)



出典: Civey 2021年9月24日時点のデータ

ト)、「対話への用意」(21パーセント)が強みと見られた。アルミン・ラシェットが対立候補らに比べて目立っていたのは、「対立への用意」(25パーセント)のみだった。このためオラフ・ショルツは、選挙戦の最終段階で説得力のある候補者と評価され、選挙戦で最有力となったのである。

5.3 勝因となった党の結束

「党の結束」という点では、主に緑の党とSPDでは政治的な意見の統一ができていたのに対し、CDU/CSUでは真っ二つに割れていた。マルクス・ゼーダーとアルミン・ラシェットの首相候補指名争いと、その後のほとんど説得力のない団結表明は、CDU/CSUを大いに弱体化させた。それだけでなく、メルケル後のCDU/CSUがいかに分裂しているかを露呈した形になったのである。今回の連邦議会選挙後、CDU/CSUの将来の方向性をめぐる論争は不可避と思われる。緑の党は2005年以降、政権には参加しておらず、2017年に「ジャマイカ連立」の樹立が検討されただけである。その結果、緑の党は新しく共同党首となった現実派のアンナレーナ・ベアボックとロベルト・ハベックと共に政治の中道に戻り、首相選への用意があることを表明した。一方、2017年の連邦議会選挙で深刻な打撃を受けたSPDは、この時の結果から急速に学習し、ついに流れを変えてしまった。早期の首相候補指名に始まり、選挙綱領作成の総合的なプロセス、そして左右両派の共闘を成功させた党指導部の働きまで、SPDは結束して進めることができたのである。それまでの選挙戦とは違って首相候補者と公約が呼応していたため、政党と首相候補は本格的な選挙活動と、首尾一貫した政策集を提供することができたのである。

5.4 終盤戦になって初めて明確となった政治的イメージ

今回の選挙戦ではいずれの党も、政策について長い時間公の場で話すことができなかった。その代わりこれらの選挙戦は、主に外部的要因からの影響を受けた。初めは新型コロナウイルス、それから洪水災害、最後にアフガニスタンの悲惨な状況である。各党の立場は3つのTV討論会と、数多くのメディアのインタビューや参加形式で繰り返し語られてきたが、明らかな分極化が見えてきたのは選挙も終盤戦になった頃だった。SPDや緑の党は、CDU/CSUや自由党と反対の立場を取り、社会、経済、気候保護政策に関して新しく出直すという明確なサインを送ることで、有権者にアピールした。CDU/CSUと自由党は、1994年の「赤い靴下キャンペーン」で有効だったように、左派党が参加しての赤・緑・赤連立の可能性を否定しないことで、左傾化を警告した。おかげでCDU/CSUは、有権者基盤を投票に駆り出すことができた。一方、社会民主主義者の首相誕生への現実的な見通しは、多くの左派党支持者にSPDへの投票意欲を与え、それにより左派党は非常に弱くなった。

6

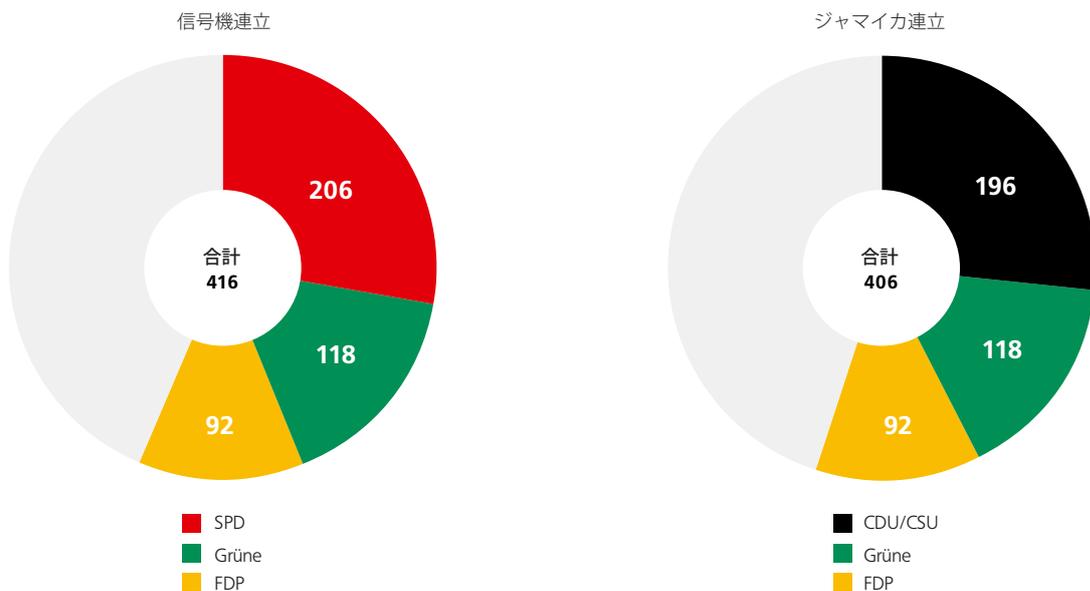
誰が新政権を樹立するのか？

6.1 次期政権は3党連立となる

2021年の連立議会選挙はまた、ドイツの連立計算にとって歴史的な転機だった。大連立政権に必要な過半数はそろっているのだが、この案はCDU/CSUとSPDの党幹部から断固拒否されているため、初めて三党での連立政権とならざるを得ない。選挙で最大政党となったSPDは、もちろん次期政権樹立の任務を担う。連邦初の「信号機連立」は、いずれも得票数を伸ばした3党で結成される選挙戦勝利者の連立となるだろう。しかしアルミン・ラシェットは、その明らかな敗北にもか

かわらず、これまでのところ自分に政権を樹立する権利があると主張し、「ジャマイカ連立政権」を実現しようとしている。だがこれには、CDU/CSU内部でも批判の声が高まっている。Infratest Dimapの有権者に対する世論調査では、大連合がよいと答えたのは回答者の3分の1近く、「信号機連立」支持は4分の1近く、「ジャマイカ連立」支持はは5分の1だった。だが2党の直接比較では、違いはさらに明らかだった。50パーセントがSPD主導の政権を望むと答えたのに対し、CDU/CSU主導の政権を望んでいるのはわずか29パーセントだったのである。

図表 14
数字的に可能な連立政権



出典：連邦選挙委員会

6.2 誰もが参加したい—困難な政権樹立

今回の政権樹立は複雑で、おそらくかなり長期化することだろう。それには3つの要因がある。

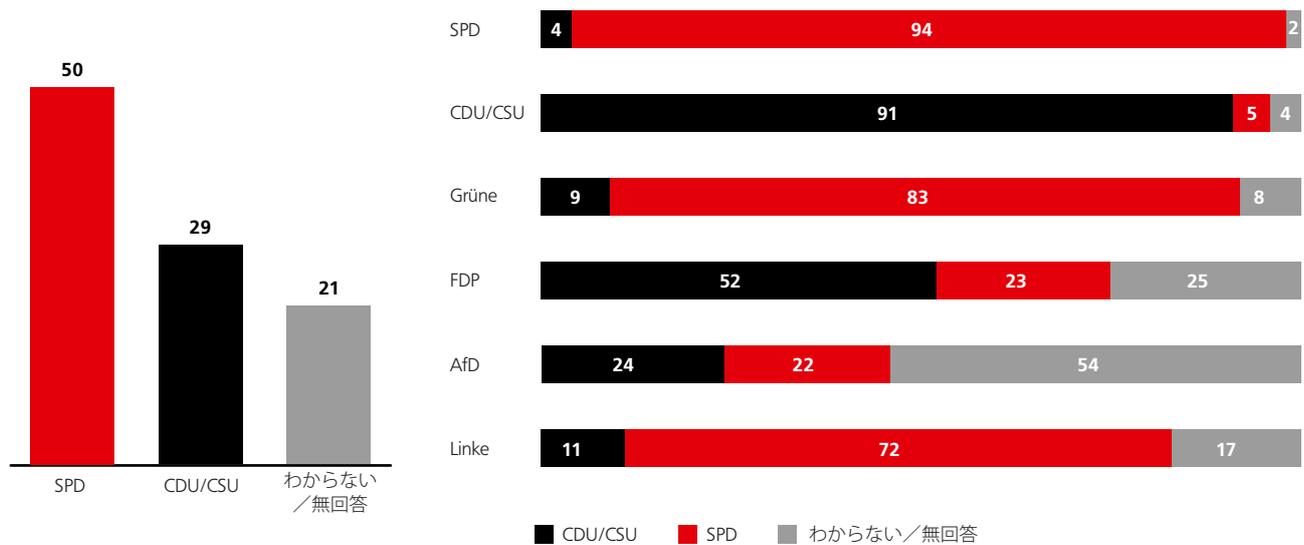
第1に、力関係の均等化だ。大連立政権を除き、これまでの連立政権はいつも主要政党とそのパートナーである小政党との間に明らかな力の不均衡があったのに対し、今回、3党の力の格差はずっと小さい。得票率がせいぜい20パーセント台の政党が首相候補を出したというだけでなく、相対的に力が拮抗している状況も、連立協定や組閣の際、3党間の政治的な妥協や調整に影響を与えるだろう。だが、やはり少数パートナーである緑の党とFDPにとっては、SPDが両党合わせたのと同数の票を集めたことは無視できない。

第2に、多数派に加わることができれば、選挙の敗者でも勝者となれることだ。今回の選挙は、CDU/CSUにとって結成以来の惨憺たる結果だったにもかかわらず、アルミン・ラ

シェットは新政権で主導権を握ることを目指しているようだ。だがそんな計画に、同盟内部から支持が得られ続けるかどうかは甚だ疑問である。とどのつまりラシェットは、連邦共和国始まって以来最悪の選挙結果の責任を負っているのだ。だが緑の党と自由党から見れば、弱体化した交渉相手は魅力的だ。打診の際、思い切った要求を突きつけることができるからだ。

第3に、何のマスタープランもなく、全て白紙の状態だということだ。このように明確な過半数政党がない状況で、政権樹立の方法を定めた憲法上の指針はない。誰が誰と交渉するのか？ 何について？ いつの時点で？ 少数派の連立パートナーが、大きい連立パートナーに近づく前に互いの共通点を探るべきか？ それとも2大政党が采配を振るって、枠組みを決めるのだろうか？ 成功するのは最も交渉力があり、この状況に応じた準備ができており、そして最も魅力的な提案ができる党だろう。

図表 14
数的に可能な連立政権



母集団：ドイツの有権者

出典：infratest dimap.

7

結論

2021年連邦議会選挙は1つの転機、今後の方向性を決めるまさに歴史的な選挙だった。40パーセントの支持を集めた政党が弱小政党1党と組んで政治を行う時代は終わり、もしくは特殊なケースとしてしか考えられなくなった。その代わり、今目の前にあるのは、得票率20パーセント台の政党が2つ、10パーセント台の政党が3つ、あとの政党は1桁という状況だ。異なる計画、目標、プロジェクトを、1つの連立政権のアイデンティティとして融合させることが肝心である。それに関して有権者らは、ドイツの近代化を望んでいることを、はっきりと示した。明確な政策だけでなく、様々な社会グループに幅広く根付くことが大きく役立つだろう。その点SPDは明らかに有利だ。本分析で示したように、異なる人口グループからの大きな賛同を受けているからだ。さらに緑の党とFDPがもたらすアイデアや政治的環境が加わることで、ドイツにとって興味深い集まりができるかもしれない。社会正義、気候保護、経済に取り組む各政党は、ドイツの新しい社会契約への道筋を決めていくことだろう。

図表目次

- 5 図表 1
2021年連邦議会選挙比例代表制の得票率
- 6 図表 2
2017年連邦議会選挙と比較した得票数の増減
- 6 図表 3
2020年ドイツ連邦議会の議席配分
- 7 図表 4
比例代表制 東西の比較
- 9 図表 5
年齢層別支持政党
- 9 図表 6
職業別支持政党
- 10 図表 7
2021年の連邦選挙で、あなたの投票判断に最も影響を与える3つの政策テーマは何ですか？
- 12 図表 8
投票者の移動 SPD
- 13 図表 9
投票者の移動 緑の党
- 13 図表 10
投票者の移動 CDU/CSU
- 14 図表 11
投票者の移動 棄権者
- 15 図表 12
今回の連邦議会選挙において、これまでのところ、どの政党が最も説得力のある選挙戦を展開していると思いますか？
- 16 図表 13
連邦首相の政治スタイルで重要だと思うことは何ですか？
- 18 図表 14
数字的に可能な連立政権
- 19 図表 15
有権者はどの連立を望んでいるか？

Imprint:

© 2021

Friedrich-Ebert-Stiftung Tokyo / Japan

7-5-56 Akasaka

Minato-ku

Tokyo, 107-0052

Japan

Tel: (03)-6277-7551

Fax:(03) 3-3588-6035

E-Mail: office@fes-japan.org

www.fes-japan.org

Responsible:

Sven Saaler, FES Representative in Japan

本出版物に掲載される見解は筆者の責任の下で記された個人的見解であり、必ずしもフリードリヒ・エーベルト財団のものとは限りません。

FESが発行するメディアをFESの書面による許諾なく商業的に使用することを禁止します。FESの出版物を選挙運動のために使用することはできません。

タイトル写真 : © picture-alliance.com / dpa / Karl-Josef Hildenbrand

構成 : www.stetzer.net, www.leitwerk.com

組版 : Britta Liermann

A watercolor palette with various colors and a brush. The palette is open, showing several wells of paint in shades of green, purple, red, and yellow. A brush is visible on the right side, with some paint on its bristles. The background is a dark, textured surface.

2021年の連邦議会選挙は、転機となる、今後の方向性を決めるまさに歴史的な選挙だった。SPDが政権を取り戻し、ドイツ連邦議会での最大の政党となった。比例代表制の得票率25.7パーセントという勝利は、同党の首相候補オラフ・ショルツに負うものだ。アンゲラ・メルケルの時代は終わり、キリスト教民主・社会同盟（CDU/CSU）の得票率は24.1パーセントと結成以来最悪の結果に終わった。2017年の選挙に比べ、CDU/CSUの得票率は8.9ポイント下がった。緑の党は得票率14.8パーセントと、これまでで最高の結果ではあったものの3位に終わり、首相の座を勝ち取るという目標は果たせなかった。4位の自由民主党（FDP）は、比例代表制で得票率11.5パーセントと、わずかな票の伸び（0.7ポイント）を見せた。

40パーセントの支持を集めた政党が弱小政党1党と組んで政治を行う時代は終わった、もしくは特殊なケースとしてしか考えられなくなった。今回の選挙結果は新たな連立の形成を意味する。CDU/CSUとSPDの党幹部は大連立政権の継続を拒否しているため、来る政権は3党連立となる。選挙で最大の政党となったSPDはもちろん次期政権樹立の任務を担う。連邦初の「信号機連立」は、いずれも得票率を伸ばした3党で結成される選挙勝利者の連立となるだろう。

**FRIEDRICH
EBERT****STIFTUNG**